



炭	火	冬	雪	冰	霜	冬	十	神	十
炭	桶	佛	在	枯	雲	夜	神	留	月
炭	湯	吹	鐘	霜	冬	御	神	王	神
竈	婆	雪	水	在	雨	取	迎	玄	無
炭	桐	搖	初	霜	眠	越	玄	猪	月
燒	火	籠	霰	の	山	戎	猪	芭	初
炭	桶	口	初	月	風	誦	蕉	蕉	冬
斗	埋	切	雪	初	初	初	忌	忌	小
丸	火	盧	雪	水	霜	時	御	命	六
炭	鉢	開	霰	薄	初	雨	講	講	月
衾	火	凍	凍	水	霜	時	達	摩	小
	達	車	車	水	霜	雨	摩	忌	春
						冬	忌		神
						空			送

蒲團紙子頭巾足袋寒靴
 胙 冬 日 冬 月 冬 夜 月 寒 月 呀
 呀 夜 寒 月 冬 野 冬 山 冬 川 枯 野
 冬 枯 百 湣 野 落 葉 木 之 葉 冬 未 立 散 紅 葉
 狂 花 歸 花 麥 蒔 大 根 引 朽 葉 枯 柳
 茶 花 山 茶 蒼 批 杷 花 公 手 花 干 大 根 冬 椿
 冬 牡 丹 冬 菊 枯 菊 寒 菊 水 仙 石 落 花
 枯 尾 花 冬 梅 寒 梅 枯 芒 枯 芦 枯 蓮
 冬 雁 網 代 守 柴 漬 蠟 生 海 鬣 水 鳥
 冰 魚 鴛 鴦 浮 寢 鳥 鴨 千 鳥 鷓 鴒

小雨卷冬目一

小 鴨 冬 蠅 冬 鳥 冬 蜂
 霜 月 冬 至 冬 至 梅 曆 賣 大 師 講 髮 置
 袴 着 小 忌 衣 神 樂 御 火 焚 納 豆 餠
 冰 餅 餠 鯁 藥 喰 五 子 酒 蕎 麥 湯 鯨
 鷹 野 鷹 寒 苦 鳥 啼 鳥 暖 鳥
 鳥 叫 偷 起 鳥 夜 興 引 乾 鮭 牡 蛎 鋸 燒
 鉢 叩 綿 子
 師 走 乙 月 乙 子 朔 日 事 始 臘 八 寒 入
 寒 雨 寒 念 佛 寒 聲 呀 寒 垢 離 寒 行
 寒 叅 獵 枕 師 走 梅 室 咲 寒 椿 玉 祭

衣配古曆曆賣年越豆
 去除夜
 於刺餅搗餅筵餅花煤
 拂子燈心
 岡見年忌節季候節季年
 市年暮
 行年年坂懸取年木樵宵
 飾米火
 年用意大年大年日春
 待年惜年夜
 年末年籠雜喉寢年內暮

小西卷冬目二

類題發句小西集冬之部

平安艾園先生輯
 湖東雪園山朗授

十月

十月
 十月やこもふれてのちもふれ
 十月の風の中を 芦乃 警 為壺
 十月のちよふくも小葉うれ 希線
 十月や毎日来る 松系 夢 碓山
 十月や葉の木雨の夜のも 之成
 神無月 赤水と葉庭のちを律五月 龜越 右乙

初冬

ぬれ石の湯を細く種五月
初冬中日の肉又やる山の月

湖岸
了暮

小六月

桐の葉のこりぬて冬の立初ぬ
あそぶる種迎傳や小六月

石舟
山彦

小春

歌芝居の雨や小六月
飛く人あやをうす産の小まが

山恋
帆雲

恙あられとあそぶや小夏のこぼし
雪とこれとあひうれや小夏の旅

茶布
一碑

ほろやりの小夏のりと守風
うらんと種るの眠る小夏の風

梅思
雪雅

小雨卷冬一

杖又子とさぬる屋の小まが

山恋

同様のの名あつた又おし小まが

汲古

庭木吹風をうくさむ小まが

而后

あそぶとさぬる松極勢の小まが

艾園

猫の森とさぬる小夏の極の踏

可大

目のあつた又換うのめし小まが

夷文

よれ流りして目の出る小まが

夷文

眼のなる小まがも小夏の夕つるを

嵐布

すれよよき日あつた又さむ小まが

丸尾

神送	神留主	神迎	玄猪
山城の山北すゝや小夫を 小夫りや傳へるを海の表 汐先の藤原ていつく小夫を 神送り新桑もつるうらら 沖中又船も是うせ守れ 系孫の孫く身寸神の男を ひのそりと福匠のひも神の男 若の穂の身又新入り神送 物くふ神のぬりう白幣	公成 礪山 松秀 野穂 甚心	若英 山朝 省三 石苔 心足	あふ 考 艾園 外雅 山朗 盛庭 枕子 一乞 足外 考

小雨卷之二

芭蕉忌	御命講	達磨忌	十夜
松又日のをれくと守ま快が 門くまらうまの中の内いのが 人いといくぬ身又結時白う肌 蒜忌中戸口又表をふりふき つんぬるぬ同のやふ蒜の日 寧ろれと吹是又うや推る本 御命講 佛又吹ぬ水の音 達磨忌 柿の耳を破る乞 人の身とあつて十夜うぬ 里のうもあつて十夜のは仕	あふ 考 艾園 外雅 山朗 盛庭 枕子 一乞 足外 考	考 艾園 外雅 山朗 盛庭 枕子 一乞 足外 考	考 艾園 外雅 山朗 盛庭 枕子 一乞 足外 考

御取越

戎講

初時雨

細う引十夜の中は嘆き
豆うらの煙る中夜や此れ越し
ゆりふらぬる又せし水糸ふし
破くは客のあらぬや戎講
のみあめのまてをせや戎講
たまたまふたも子なり戎講
煙るとも付はらるるや戎講
塵く強のまへりらんや初時雨
岩石もあつらぬれぬ初時雨
初時雨も初時雨の字は老なり

山窓
南海
化局
林曹
艾園
二燕
喬樵
好笠
月省
久我

小雨卷冬三

時

雨

時をきかぬ多き初時雨
隙とるく空の中まき初時雨
暗のまぶぬくう斗や初時雨
独居のぬれい斗や初時雨
うらまえて灯をさすや初時雨
毛羽ぬれぬるさみ初時雨
石蕨の葉も青きうひぬ初時雨
さううて水も清きぬ初時雨
を降らぬ水も清きぬ初時雨
置もと申候も初時雨と啼流

春夜
袋中
三夜
石山
徳流
龜海
蓬子
艾園
破蝶
う大

石切の移居は廿二日
 志らくや 籍の口ゆく 煙
 めの通ふはけの 時
 来りて 時
 遊ふや 人 時
 物も 出
 船を 持
 志らくや 今
 一 命

松室
 知足
 非常
 英皇
 東軍
 系湯
 嵐夕
 如續
 志乙
 魁此

示雨卷冬四

時ゆくや 度
 一 風
 時ゆくや 獲
 志らくや 机
 松の 葉
 仲の 中
 時ゆくや 如
 時ゆくや 衆
 森余りて 志

米城
 芸心
 系湯
 為る
 青海
 梅陵
 飛槍
 石母
 菜岳
 思文

たそこの風の吹く川の時
 町もんとする雪又た第一の風
 松明の中の時を乾くぬ藪傳ひ
 秋の山と吹雪の中の時
 矢もも存する市物の町
 此の山にふる雪はふる山
 町の中に入るや丘の松
 上るるや下るるや舟の掉
 雪をふる山心のよれた町
 忘ひく月と町の時

中後雄
 貞村
 中之
 古山
 孫久
 西島
 山子
 夏陰
 磯石
 桐臺

小雨卷冬五

冬 冬 冬 眠 風

冬 空 雲 雨 山
 時もわいの雪ぬ嵐中
 因もあまや久きお招の苔
 雪降寸時の中やきりく寸
 冬雪の嵐も舎式の雪ひく
 落くとも風をひく冬の時
 蕎麦莖の赤いさめて冬の時
 鶴の如く雪を来しを眠山
 を迎中おのらるる眠山
 こつじと皆ぬくやる諸うき
 ありじの中や尾上の吹雪

越盤
 葦秋
 輪和
 蕨字
 挑雄
 晴白
 艾園
 龍岳
 不角
 艾園

初霜

初霜中	や	二ツ	は	る	川	燈	の	火	林	菅
初霜中	の	中	や	日	牧	の	夕	葉	の	曲
初霜中	や	ひ	を	ま	り	返	る	葦	の	湯
初霜中	の	吹	た	り	し	る	端	山	の	山
初霜中	の	谷	は	つ	ね	て	止	ま	り	一
初霜中	や	船	引	ひ	ら	立	す	く	み	古
初霜中	や	え	ぬ	す	森	の	一	ひ	き	百
初霜中	は	た	き	る	月	中	海	の	上	高
初霜中	や	煙	も	た	す	る	る	冷	山	朗
初霜中	も	た	す	る	る	る	る	る	る	表

小雨卷冬六

霜

初霜中	や	さ	さ	の	た	る	岸	の	り	表
初霜中	や	堰	の	川	の	持	土	俵	の	古
初霜中	や	細	め	な	り	た	る	の	粒	菜
初霜中	火	の	き	り	の	き	り	の	寸	粒
初霜中	は	さ	さ	の	月	の	方	廣	寺	撫
初霜中	と	思	へ	る	菜	の	足	の	粒	曲
初霜中	の	す	も	の	谷	の	菜	大	根	根
初霜中	は	さ	さ	の	声	の	声	の	声	良
初霜中	は	依	り	の	菜	の	声	の	声	艾
初霜中	は	菜	の	声	の	声	の	声	の	園
初霜中	は	菜	の	声	の	声	の	声	の	林
初霜中	は	菜	の	声	の	声	の	声	の	曹

霜の月 船の若く梓 芳ききく 霜の月
大根も招よからりて 霜の月
雪の来 一 落よ美たり 和 氷
やうくと 秋の明く 和 知 水
そくくまよらる 中 や 知 水

梅香
能女
而后
抱儀
夫拳
信々
長眉
紀三
聖路
風河

小雨卷冬七

霜 霜 枯 柱

霜の月

初 氷

うのりの中 霜おちつる ぬ小 並 系
霜枯や 出る日 をさきき 秋の若
中 月 や 中 各乃 霜さうら
豆引く 霜の月 くりと 霜さうら
岩鼻 中日の きたれ 通る 霜 柱
船の若く 梓 芳ききく 霜の月
大根も 招よからりて 霜の月
雪の来 一 落よ美たり 和 氷
やうくと 秋の明く 和 知 水
そくくまよらる 中 や 知 水

系 一
梅 枯
艾 園
夫 老
藤 人
冬 乙
及 怪
朗 湖
秀 安

薄氷

強ゆり中戸を力に初歩
氷のしじよりぬくさぬる歩
つらむともすくせ又ある歩
ゆ又ひく清やけさう浮氷
古池や歩さすふ縁の日記
里表や歩の上の走りあ
うけ簾の歩の雪の来りぬ
洗葉の中も一歩の歩りあ
歩るる着歩て烈く歩の具
湖の水より人足せぬ歩りぬ

知足
形幹
四字
為山
た文
不角
山知
艾園
全
柳壺

小雨卷々八

氷柱

鐘氷

氷あひきりや 秋明の人あ
歩る歩と歩りぬ歩のあ
大振るあや歩る歩る歩る
緘をちくきり歩る歩る歩る
居る歩る歩る歩る歩る歩る
靴のみより歩る歩る歩る歩る
つらむともすくせ又ある歩
ゆ又ひく清やけさう浮氷
古池や歩さすふ縁の日記
里表や歩の上の走りあ
うけ簾の歩の雪の来りぬ
洗葉の中も一歩の歩りあ
歩るる着歩て烈く歩の具
湖の水より人足せぬ歩りぬ

如泉
木圭
月坡
淡島
梅通
素安
艾園
可憐
李裳
凱亭

初霰
初雪

中より木よのころ斗や初あられ	葵笠
初雪又散向けたり酔人ふれ	古樵
初雪の雪もあつて尾ふが	七也
初雪や日しをさの山斗り	一法
初雪やまの照ぬ夜の一つり	石旌
初雪やまきつれさつの一説さ	文叢
山よりその初雪もまらけり	一止
初雪の足ふくまふ果報が	知足
初雪やまの山よりそのまのよ	終雪
初雪やけしきとくまふ山	梅後

小雨卷冬九

雪

落ぬ雪よんせをさつし竹の雪	山恋
雪の目も者もつらうたをりる	簾屋
雪んすこほあもつせ守雪のちさ	月者
踏下よ老もつて雪の糸	如燈
えら又似て鳥啼 涼雪うれ	古熱
海邊てい仕さつ雪よむれらる	芸心
人の癖を雪もや雪のちる散り	乃古
雪かふる雪や 眼先のふく雪	風橋
雪もふ雪よつらむや結るる	榮旌
雪のたふれ雪もつらむや雪の結	雪翁

雪とらさけと遠く雪の 一の丸燈のぬいあし雪の家 去りゆくや庭の神木も雪の雪 とりゆく風流のぬい雪の 越人とともまたの雪や山の雪 雪足して河川に雪の雪 雪あらし雪を推しゆく 雪の井風情余りておれんと 夕晴や一日の雪拵へ 日よ向ふ朝の雪を拵へ	可憐 終井 りよ女 去季 彼路 艾園 全 古撫 故情 三教
--	--

小雨卷冬十

一二寸雪つむ鼻中一石佛 掃土中雪のぬい雪の 雪とらさけと遠く雪の 雪つむ風も雪や垣の雪 雪中や雪はひゆく雪の上 肉と雪とともぬい雪の中 おろる雪とともぬい雪の中 雪と雪とともぬい雪の中 雪と雪とともぬい雪の中 雪と雪とともぬい雪の中	朗朗 嵐英 六川 宋那 掃通 後見 山外 礪山 万像 ちるる
---	---

柳のまをりくくもやなごの雪
 友達の別をさきく雪の今
 雪の戸や山水細くくく方
 湯豆飯のうらへ連く秋の雪
 近所よまうせくくむきん
 井を一つおよぶる深雪もぬ
 雪の中も天おくらぬわこむ
 雪のよやめりくくまぬ雪の山
 雪の後の雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪

小雨卷冬十二

雪 車
佛

ため息と月よ吹たり雪の上
 楓のまをりくくくく秋の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪
 雪のうらぬ雪のうらぬ雪の雪

山朗
 五葉
 而石
 如足
 八叉
 全
 抛湖
 雪高
 月窓
 皓山

吹 擽 霰

雪

浮遊又午の霰ふ吹雪うぬ
雪うけや柿越す時一吹雪
擽や擽よかけし鶴屋の下
擽や擽よと見よ一里
擽灯の始終よさるみそれぞ
みそきくしりてふいそしや
ぬり出守後くふりぬあられ
行海の水田の浪や一あられ
吹れ来て日のさす方や飛あらし
ぬもせぬ雪よあられの霰ふ後

杉女 淡島 公子 不門 林曹 艾園 羽人 艾園 朗湖 松秀

小南卷冬十二

冬 凍

吹雪のそくそく雪のまじりけり
大凍よううて烈しや初あらし
子又交てるおれ南あらし
投てけり奔よとらるるれり
新く出やゆれをて居る使が
義の凍鴨よゆらせぬましぬ
唐の冬よせぬの日南緯より
唐の山斗りの冬や山の嶽
冬よれやゆらうさうか葉末
蕪きし擽や冬の鬼瓦

曲阜 梅窓 舟井 擽書 雪後 曲川 う大 艾園 山恋 全

冬 搦

方盤木や自らうる冬うま

後末

冬 籠

月のさす定ハ踏し冬雪元

吹草

只起く布たのりや冬うり

支草

掃ふ口を除てもおつ冬うり

寛村

いりとうき掃のよれや冬うり

不角

雪の世話も飽く冬うり

扱外

彼見し比み日まぬ冬うり

芽舎

ぬじやうふりて掃せ冬うり

艾園

飄雪の種ふり出く冬うり

雲田

而辰

口 切

火 爐 達 開

その毒もせぬハ麻安一冬籠

東里

張交よのつれり冬うり

山魚

口切又ぬりておし 藁と草

惟系

口切や 雪せとめ 一 釜水

未足

爐つりてして炭なる冬うり

卜少

高又せぬ馳走や船のむり

硯水

棚のりの扱て炭る冬うり

一飛

多姓こや 冬うりの上の硯 策

弓古

仍そり又る炭のりる冬うり

艾園

立し炭の名残も落し 釜巨煙

月波

小雨卷冬土

火 桶

火	桶	系乳のぬくみも沸くも桶	佳月
湯	婆	あそびねてぬくみのりる火桶	編下
桐火桶		るもす佳やも桶の極るる	旭芝
埋火		押しやねのりの日もすくも桶	丁知
		只つつ五火を切や抱火桶	定介
		捨つるも木の突極る火桶	為石
		捨つるも抱衣しるも桶	縁和
		箸りるも垂射るる湯降るれ	其名
		そのつるもうねる人の桐火桶	其化
		埋火や札のりるものつるも	多吟

小兩卷冬十四

火 鉢

埋火	鉢	埋火や沸て右てそのむ垂不	而后
		雑はをうせくゆ守火鉢	艾園
		柔つるも手揉るも又黒も火鉢	三岳
		つ燃よゆれたりや火鉢の皮	艾園
		火の外の石もや中て火鉢	卓程
		火の外の月敷も火鉢の火	其池
		火の外の火鉢も火鉢の火	其池
		味も火のゆれて干るも火鉢	其池
		火の外の火鉢も火鉢の火	其池

炭

扱ひもろくへ〜〜〜	扱の炭	芳村
赤く焼けたら〜〜〜	赤炭	中野
炭又火の〜〜〜	赤炭	艾園
炭の赤の〜〜〜	赤炭	鷹谷
赤付るよ〜〜〜	赤炭	古熱
炭の赤や〜〜〜	赤炭	枚外
焼くものよ〜〜〜	赤炭	梅尾
炭ふむや〜〜〜	赤炭	万古
山出〜の炭や〜〜〜	赤炭	李噴
赤と〜の〜〜〜	赤炭	連々

小雨卷冬十五

炭

竈

炭

焼

丸

炭

衾

炭の赤や〜〜〜	炭	斗丈
炭の赤又〜〜〜	炭	波洞
炭の赤や〜〜〜	炭	龜尾
炭竈の〜〜〜	炭	鷹尾
炭竈中〜〜〜	炭	鹿池
炭焼の〜〜〜	炭	鹿英
炭又〜〜〜	炭	鹿智
炭一ツ〜〜〜	炭	鹿里
炭十〜〜〜	炭	文登
山冷〜〜〜	炭	初盤

蒲團	紙子	頭巾
<p>靴の底で足ぬかすに破き合 ちよ藤で結縷さうさうんぬ うさせて緒うさうさうんぬ ま心の中さうさう紙子うぬ ゆらぬを絆又さう紙子うぬ ゆをやく杖も紙子又通さうり 只一つ主婦の中紙子うぬ 扱扱て袋の中さうさう紙子うぬ 風呂りあて来て尻中さう使さ 人先人押さうさう紙子うぬ</p>	<p>如隆 石半 艾園 茂里 兼雄 艾園 西郎 八叉 五心 石半</p>	

小雨卷冬十六

足袋	<p>紙のうさうさう鼻をむ尻巾が 足袋の砂さうさうふたぢやりのま 粉のさうさうさうぬ又出さうさ 手の風又厚のさうさうぬ 塗立の堀ぬて通さうさうぬ 羽さうさう窓をさうぬ日新さ 唇中さうさう赤さうの窓さうさ 出這入の人より後さうさうぬ 人の来る度又たさうさうぬ 藤さうさう足の伸さぬさうさ</p>	<p>生野 兼田 龜極 全 大赤 可慈 藤原 足兼 只さ 艾園</p>
----	--	---

鞍

牛よあはと顔るるれくろ寄ぎ
去ぬ先又燈と申り寄る風
松風の音より寄るたきさうの
岸へのりられも寄るはるる
水路の音も短く寄る風
日當りの極先寄るうしろ風
並ひれし是れと持寄る風
いひそめり日刺の中寄る風
笹敷て鏡の敷く寄る風
りりりと結ぶ寄る風の音

茶山 夜燈 魁丸 鳳号 梅流 異化 而后 艾園 山恋 雨地

小雨卷冬七

臘 冬 冬 月

臘うゆき日や雪も来せり
二百里ぬ粟のふるもりり
冬の日のさすや時中の忘水
まろのふる藤うし出る冬の月
冬の月思くい糸も山の中
汐の音の子の光るや冬の月
そらうよれぬ又ふらや冬の月
山の端や海りのそそ冬の月
たあしよるるれはれ冬の月
咲かて梅その傍と冬乃月

茶山 艾園 山石 雪高 夫妻 古葉 大夏 且末 芽令 寸松

寒月	冴夜	月冴	月寒	冬夜
寒月の吹きやうららかなの上	冴夜や清く涼く木の葉の火	月冴てるの静のうららかな	月寒の月影をくまのたもと	冬の夜中地裁のそよ風
松女	文研	梅陰	可憐	吾侪

小雨卷冬十八

冬野	冬山	冬川	枯野
冬月の柴の庭のこぼれ葉	冬の山の麓白一掃またをうら	冬の川雪は又清く水もろく冬の川	枯野の草は又枯れぬ
大夏	雅琴	芸心	思風

冬月の柴の庭のこぼれ葉 大夏
 冬の山の麓白一掃またをうら 雅琴
 冬の川雪は又清く水もろく冬の川 芸心
 枯野の草は又枯れぬ 思風
 夕日さす方又甲ろる枯野が 嵐英

冬 枯

蒼々たるぬくい目のさす枯野
たんとりよのむ吹捲る枯野
地々々々の沖より返る枯野
貝壳と鳥の現く、 九野
日暮るとあふ申ん中 枯野
家りくくけりくくくく枯野
船舟くりりりりりり枯野
か〜〜のさり守ひ〜枯野
か〜〜のさり未〜ゆり枯野
く〜〜のさり未〜ゆり枯野

越後 一 船 意知 如泉 十上 山口 山意 梅渡 藍屋 改幢

小雨卷冬十九

百濟野 落葉

摺ち又を枯れち〜松の夢
あす枯れ又汲いあや〜 艾園
岸杖の枯れ〜 磐山
く〜〜野や鷹〜 丸山
人〜〜のさり〜 中之
葉〜〜のさり〜 意吟
出の爲〜〜のさり〜 艾園
戸又〜〜のさり〜 及情
浮よる泉即〜 松秀
二三の葉〜〜のさり〜 朗湖

摺五 艾園 磐山 丸山 中之 意吟 艾園 及情 松秀 朗湖

柵りし落葉はやせの流るれ
 拍石
 持ひ返りしくもる落葉は
 兼阿月
 掃き去るの跡は雪の中は落葉は
 兼圃
 矣んよて堆積せしる落葉は
 松雨
 程をいつてまや落葉の堆こり
 丹炭
 よれをちや落葉あく子の水あり
 半窓
 落葉くくぬの刺さや火袋
 斗丈
 焚くく落葉の床中を露ふ
 寸松
 吹れ石を果の流るる落葉は
 可然
 落葉はまほしくあやとよれ落葉は
 李慶

小雨卷冬二十

木の葉
 搔き去る落葉せんき返り風
 山鹿
 いさくし般木は儼然の落葉は
 梅後
 雪よまも木葉も枯れり果るれ
 可大
 初りる散るゆりり木葉の影が
 中道館
 定りるもよや木葉の影は葉は
 盤座
 一志をりきよ交やちる木の葉
 弁山
 ゆきうりて木の葉搔きくぬる葉
 梅史
 根さじを掃く志川や木立
 碎梅
 跡の葉ははるあや木立
 鼎た
 山をの尾は風らんとて木立
 仙毫

冬木立

山をの尾は風らんとて木立
 仙毫

散紅葉

さす月又たる古ひすを木立
掃く中の一葉二葉や散る葉
ちりちり空をさすのそらに散る葉
賑はしきりののちの散る葉
ちりちり一葉二葉の散る葉
けしよささひしき増や散る葉
水都の池の車やちり散る葉
見後すや大根畑も散る葉
返りむも新あのを散る葉

淡若 采女 糠人 石皮 関市 不保 冬宮 果中 古煎 山恋

狂花 歸花

朝月よささひしき増や散る葉

小雨卷冬止

朝しき時中の文字中ゆりふ
らん夜よつるあひわつ返りむ
見おしき散る葉の中やゆりむ
円餅又ひかりと空一ゆりむ
咲うのち木もあつてゆくゆりむ
賑はしきりののちの散る葉
ちりちりと掉りさすの散る葉
深し葉はさすのちの散る葉
名の志おぬさすのちの散る葉
笑ハこそ散るのつくりゆりむ

梅陰 見葉 其内 雪雜 五雀 古煎 今 艾園 枝女 交水

麥 蔣

大根引

ふりて今おろきふりてゆふ	麦蔣中より新をぬ海の上	麦蔣中より人として草をまき	麦蔣中より日よりの草をまき	手押ししてふりてゆふや大根引	船泊り船一日休めて大根引	船泊りの湯をこまや大根引	舟脱りや洗物に大根引	舟をこまや大根引	子とてゆふ船に大根引
秋和	松竹	うた	三巴	舟	月東	悠々	風雨	養香	艾園

不雨卷冬九二

枯 朽 柳 葉

茶 花

藤々若れぬ旭のさすや大根引	舟中より新をぬ海の上	水々る力こまや大根引	舟の草を抜く柳もよりの	蟹又つらぬ新をぬ海の上	山草をぬ海の上	茶の花中より新をぬ海の上	茶の花中より新をぬ海の上	茶の花中より新をぬ海の上	茶の花中より新をぬ海の上
超雲	文安	八子	不角	雀雙	淵平	藤人	葉渡	艾園	全

山茶花	山茶花の咲く所は凡そ山に生ずる	林曹
山茶花	山茶花の葉は冬も枯れず	全那
山茶花	山茶花の花は白く咲く	淡那
山茶花	山茶花の葉は厚く生ずる	佛孫
山茶花	山茶花の葉は光沢がある	為山
山茶花	山茶花の葉は冬も緑色を保つ	百丈
山茶花	山茶花の葉は冬も枯れず	大年
山茶花	山茶花の葉は冬も枯れず	序連
山茶花	山茶花の葉は冬も枯れず	九鼻
山茶花	山茶花の葉は冬も枯れず	知五

小雨卷冬九三

枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	茸村
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	卓裡
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	斗火
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	猿和
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	知足
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	文海
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	豊南
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	教院
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	名山
枇杷花	枇杷花の葉は冬も枯れず	雲海

冬 椿
干大根
八ツ手花

冬牡丹	石印の控へ通つやまのつる	拈三
冬牡丹	赤遠の御香とあやみ	丁百
冬牡丹	百丈の庭又も笑中をの葉	森十
冬牡丹	拈葉の折れぬさうりてをいふ	一笑
冬牡丹	修しぬそ眼やそ葉のさうり	う大
冬牡丹	拈葉中日の入まての一仕り	為山
冬牡丹	空葉中一嘆又方のるれ葉のさう	唯可
冬牡丹	空葉中修しぬそ眼やそ葉のさう	波路
冬牡丹	空葉中一嘆又方のるれ葉のさう	飛二

小雨卷冬廿四

水仙	空葉中一嘆又方のるれ葉のさう	之成
水仙	空葉の蒼葉の中葉のさう	波同
水仙	空葉中日の入まての一仕り	起風
水仙	空葉中夕日も笑て小す	後可
水仙	空葉中修しぬそ眼やそ葉のさう	不世
水仙	空葉中結葉の日のさうり	可世
水仙	拈葉のさうり月のさうり水仙花	森函
水仙	蕪葉のさうり月のさうり水仙花	可世
水仙	新葉のさうり月のさうり水仙花	艾園
水仙	水仙の中さうり月のさうり水仙花	泉取

石落花

水仙の藪招くもや小樽塚
水仙中なるれそあこしけ
よのきのられれあこしけ水仙
水仙や藪を小樽の極とて
川も井もくわくされと石落花
居やしく石も系りついの花
ゆれれ居るひくけりついの花
ゆれれ又あこしけや石落花
午耐よの目あはさく寸石落花
よそ人來てし急後ろついの花

園南 拋湖 梅渡 如陸 文藝 宗那 為香 艾園 兆二 雪庭

小雨卷冬廿五

枯尾花

鴨もあはさり一日中 枯尾花
羽るれあつあもさき 枯尾花
よそ人來てし急後ろついの花
川よせて折るもつあ守 枯尾花
おの根又折ひはれぬ 枯尾花
意のけい池又さうの中 枯尾花
山の井井れらう又ある 枯尾花
ついのちと城はあこしけ 枯尾花
二三早ん程の白ひ中 枯尾花
皆候てあはさり日あこしけ 枯尾花

雲子 弄紀 艾園 月披 岳鳳 梅史 二全 秋吉 古熱 東舉

冬梅

寒 梅
枯 芒
枯 芦
蓮

何となく是より又別く是より梅	あゝの梅はとらたしとせりしひりり	ひくみくく笑のわりたり冬の梅	たきよさ守日よあさるるの梅	ゆゝひりり足よとての梅とあゝの梅	室の梅や雪ふ三十日のやとて改	拈そめて梅の記うらるる芒うれ	かゝる芦形ても同じい立あし	その照つとくしうりて甚あし	拈甘の中ゆり流て飽のうら
艾園	瓜山	不木	うぬ	う大	艾園	暮草	とく	艾園	東村

小雨卷之廿六

冬 雁
網代守
柴 漬
蛎

冬 雁 田の畝よきくみきくやあゝの厂	網代守 是も柳のゆきしうれ	ゆれそ来てさくさくさくや網代守	内中へ珠粒もねふゆりあさ	動うぬい網代守やあゝあゝ	柴漬中 是又終るる出蔬系	岩よ身売もけきや 蛎 是	月のとれそ蛎ゆきよえゆき	蛎 是中 是つゝ蛎もあゝの友	蛎 割中 是つゝ月のさす南風
と岩	古熱	逸中	艾園	半窓	可高	砥山	雲堂	而后	大年

生海鼠

冥てうう 拵工まじり 生海鼠が
ありとてよまきくぬき中この白ひが
居仕家や 借りあしとて養生こ
知れる程生海鼠の 延く富士向し
水多や 重きうり又う川 室の古
あきの逆毛吹りり日枝 鹿し
水多の 藤雨や 月も多しぬ剛
水多の くらわすら 拵又あしとてよ
水多や ちとをえよとて 藤のひれ
生海鼠 水多の ねすりの 裏静

花多

吟風

梅花

不門

水塘

五葉

艾園

化蜀

雲汐

艾園

小雨卷七

水鳥

水魚

鴛鴦

うらや 中 夜 大い 鹿と水と 振る
鴛鴦と とうり 藤の 鴛鴦の 藤 是く 鹿
けさよりの 教の あく けの 地の 記書
夕の ねと 夜まき すと ぬき する ね 鴛鴦
夕の 朝の つまや の うり 浮 藤 多
ねと する ね 並ひ 中 の うり 浮 藤 多
うらや 中 夜 大い 鹿と水と 振る
けの まき 藤の ねと 浮 藤 多
連く する 又 あり 穴多 鴨の 多
左と 右に すうと とも 又 守 多の 鴨

艾園

梅通

美家

山魚

希云

艾園

名山

丈草

南鶴

完伍

鴨

浮寝鳥

千鳥

重なる時未あき鴨の春	三巴
好事もあきも和くくく鴨の鴨	知足
秋の鴨ひらあうとあふ想うりり	柴石
ともあきしく皆あや池のうも	柴人
月の出くはあふくあび小鴨の	古燕
畑のうとくく時、ぬく鴨の春	六川
あきうくくく通して眠るあも	少吉
二の風又又集るやみくも	艾園
秋毎哉すきとりやねも老くも	全
夕風やうくくあきのあねる	采女

小雨春巻六八

秋ゆくも風のくくくや啼あき	山鳥
雉をわるきめりちるあはるの浦	梅渡
あきうわん秋木のゆりり磯あき	百方
風をうく又ゆめあきうくあきうん	あ山
空の気うく二又も眠えて少秋樹	秋海雄
けいあきあきあき又押れて返くく	抱儀
あきうくあきうくくの上や啼あき	左乙
あきのあきうくく又磯のちやうく	月春
菜畑の旭又のうくあきうく	溪高
川のあきと啼あきのあきうく	後樹

鳥 鷓

かこらふれぬの唐ぬ中へ鳴あを
あつちをれぬあつちよつてあつち
新炊又新葉煮しきあつち
らつきあつちのつらぬ田あつち
海苔菜又斤よの粒の子あつち
己う新炊あつちのやあつち
ちや起るあつちあつちあつち
常しあつちあつちの透中あつち
夕飯又あつちの上越すあつち
新炊あつちあつちあつちあつち

波路 万古 春柳 素履 風 鼎 既 知 八 又 夏 唐

小雨卷冬九九

冬 小 鷓

人よさく風はらきをみそ
二つあつちあつちあつちあつち
みそさくあつちあつちあつち
足取も新炊あつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
川あつちあつちあつちあつちあつち
餅を折あつちあつちあつちあつち
つらきあつちあつちあつちあつち
一ねり田あつちあつちあつちあつち
日の定中あつちあつちあつちあつち

八子 杜鵑 艾園 秀枝 素履 春燕 山鰯 柳湖 千石 孤客

冬 鳥 今ハ世又ハ子ト云ク招ク守ルノ魂 東屋
 冬 蜂 冬ノ冬ノ愛火トモ怖んト云 佃川
 冬 蜂 蜂ト山又東ノ日ト花中冬ノ蜂 扁

霜 月 霜月ヤ花又ちつき冬ノ終リ 半仙
 冬至 厂ハまゝ集ル年又ト云ク冬ノ終リ 碓石

冬至 梅 梅挽ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 梅高
 冬至 梅 引枝ノ依ル先ノ冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 栗田
 冬至 梅 床トモ集自ノ中ノ冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 拾山
 冬至 梅 如一

小雨卷冬三

曆 賣 小セハ一ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 連湯
 大師講 万灯又云ク一灯ヤ大沙彌 知足
 髮 置 髮ト中ノ冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 松管
 袴 著 袴ト中ノ冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 木山
 小忌衣 振ウ紐ハ天降ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 如一
 神 樂 冬又ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 其笑
 一 難ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 五番
 星 神ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 彦雄
 御火焚 御火焚ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 珂月
 納 豆 納豆ト云ク冬ノ終リト云ク冬ノ終リ 鳴江

鰻

氷 鮫 鱧

寒明てぬくこころ中納豆汁
所乾時のお約束や納豆汁
飯けや飯と云ふてお中納豆汁
飯けや梅と云ふ席の別世界
乾お風又飯投出て市の飯
飯喰つて人の笑顔中納豆汁
つゆもあつて月の中飯の友
ゆきゆきと又け落中納豆汁
花の餅餅妙又梅と氷りたり
鰻鱧の飯と云ふて中納豆汁

石中
乃山
松室
投女
鳥谷
湖岩
二熊
系竹
艾園
河月

小雨卷冬一

藥 喰

玉子酒

蕎麥湯

鯨

鷹 野

鷹

寒 苦 鳥

さ 啼

秋 纏 中 沙 走 の 飯 の ち め 中
お守とらふお守とらふお守とらふ
お守とらふお守とらふお守とらふ
今つゆの蕎麥忘れたるゆりぬ
切實又足保つよそのうらむ
迎足の子きお舟中うら実
風節又お守とらふお守とらふ
それお守とらふお守とらふ
吹止ぬお守とらふお守とらふ
ささ中お守とらふお守とらふ

葦村
朗山
荻子
艾園
菘池
知豆
艾園
大泉
時渡
梅岩

餅 花	餅 筵	煤 掃	子 燈 心
つらむや しらむや しらむや しらむや しらむや しらむや しらむや しらむや	縮のちひな 舞のうき 舞のうき 舞のうき 舞のうき 舞のうき 舞のうき 舞のうき	しをり しをり しをり しをり しをり しをり しをり しをり	子燈心 子燈心 子燈心 子燈心 子燈心 子燈心 子燈心 子燈心
逸也	艾園	杜蓼 令水	是也

小雨卷五

節季假	年忘	岡見
節季假 節季假 節季假 節季假 節季假 節季假 節季假 節季假	年忘 年忘 年忘 年忘 年忘 年忘 年忘 年忘	岡見 岡見 岡見 岡見 岡見 岡見 岡見 岡見
未明	而石 献之	逸史 艾園 知足 頼甫 采那 玄和

和布刈神事	節季	年市	年暮
かきやき重なるりて落合を 其季のゆかりありて染る所 をりつとて夫とありの種りなり ひまの札もひまふ長季なり 年市の人や能きもの挽て年の市 年暮もや市のまよりる重なるか 賣残り挽くよりや年の市 はつききと重なるひや年の暮れ 篠刈り重なるつらんとのれ 年のくれ及んば味よりく志あり	淡島 不夜 如豆 子延 江波 不二門 船湖 山恋 文翠 船湖		

小雨卷冬世六

年坂	行年
はるあま糞くむきや年のくれ 水の方もあへて年のくれぬ 日もあつて延くさるや年のくれ り年の世のまより又山一ツ り年の人をもえり所は田舎が 約處中文書も年のれりなり り年の第一あつる球うぬ り年の新又賦中 船系も り年のやゆな挽ね針使書 はるあつてあくとあつる年の板	艾園 万像 園南 梅丸 曲集 宋人 松蔭 艾園 山朗 一之

懸取	云々	女園
年木樵	加つての飾りもあつた年木	東里
宵飾	年木ともあつた牛の田舎	嵯和
木火	積上つたあつた年木	梨湖
年用意	牛の脊も帯りて年用意	雲子
	梅うらり又子種紅年の用意	石室

小雨卷冬卅七

大年	大年のついでに世の人てを	遊亭
大卅日	いづねやもあつた賑や大三十日	兄翁
春待	美妙中揚の山家のうらり	一水
年惜	年惜む心者うらり	砂山
年夜	飾りやて年ち登のたうらり	石室
	燈打てやうらり年此名飾	山魚
	年仕舞の灯りて年あま	全
	年の夜や女の燈の切刻	龜松
	梅又のうらり年の一物や船のり	如庸
年末	香気又あつた日あつた年末	梅法

年 籠
雜喉寢
年内立春

かきく川音のや年このり
るもあゝぬんまのひささねん
つひのまのまを中將戸の柳吹
年の月よぬりもまてりる水

丈翠
万幸
山恋
梅後

類題發句集冬之部終

小雨卷冬卅八

附録附合之部

き沙中一筋光るるるの水
柔うゝゝ又常きり
最綿柄もを出入り威
奥を短居又衣うゝり
冥れの竿きゝゝと昇月
初うゝもきゝく掃ゝ子市
砂をゝとんゝら勢も曲をせ
世と持ぬのをも縁の美程

林曹
艾園
曹
園
曹
園
曹
園

返すのち葉の素は又遊中なり
 ますわの具よとてうさるる
 盆石は移してありとて修治を
 押の川に席をへるる友向
 ちの宮より段のすみ果かを
 用ひ中とてすくくは又厚く
 ちよろしくと遊運上るゆれ嵐
 沸を返してとて中一壺汲
 菰戸とて川せいの市成に
 初午は一日ひひハぬるさる

曹園 曹園 曹園 曹園 曹園 曹園 曹園

小雨巻附一

美風は仁王のまろくし行り
 煮え桑をうけてわく燧ゆ
 お紐の未進つてふあひよりの
 山名のまのまらら活るる
 口そく水はあつる木芽の各
 旅の川神は蹴押れ風
 後の朝火桶抱え人後こころ
 心ひりさるぬみ切れる春系
 伴物よりきり大路を附り
 心を海にそとのあつらる

曹園 曹園 曹園 曹園 曹園 曹園 曹園

奇振れは木るあろつくあゆま
 文七納の坂のたつあゆま
 汐川の八川又帆のうさあゆま
 二百巻れは細の想美
 もよ合ぬ海う山海をついでせ
 風軽うう返うぬ舞の志あゆま
 心のちをひらるる廣葉あゆま
 嘘ううりく若のうらあゆま
 曹園曹園曹園曹園曹園

小雨卷附二

灯の書よふえとゆは中月のあゆま
 形よまらぬ風のさうらあゆま
 け年ほらうふい旅の志あゆま
 背後ささ石のうらあゆま
 とうくの熱く毛虫あゆま
 靴くあゆまあゆま
 馬空の又あゆまあゆま
 鞍ふあゆまあゆま
 の成よあゆまあゆま
 このあゆまあゆま
 城兄 女園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園

菽ち人ぬめりくろ塗敷や逐逐せ
 狩^グ写すそそぬちしんが
 舟二重の櫓をいやうらめひ猫
 ひうらの妻は湯漬すめり
 今かろく戸は出さぬ六月掛
 舟の隙とゆのさ守川
 魚子賣茶^チの叫^コる^ル花^ハ 盞
 乳をうめれ牛の爪をわさす
 押合のて幕をこわす藁の依
 子孫の谷へもくく吸壳
 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園

小雨卷附三

山姫の結風吹とるあうらん
 みそちの肩は二交の縁中
 中庭の作り卑下さる櫓は揺れ
 あうけの東をまごるぬ巻片
 かくれり出り吹雪の残る岬
 秋の鴨う川波のつれなく
 鼈耳のちんちん子り舞あそ
 肩の痛くうきりぬる孫
 放しちる魚人月とる糸
 一葉の楓舞あへらる
 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園 兄 園

内侍も皆うそを穿ての振廻
 来てハ糞まじり此れの大
 社会とよハ成りし地震は
 ち申すぬ湯をうま火ともす
 意のゆい返くわと朋うき世の上
 嘴も丸く強み山うけ
 見園見園見園

〇
 みやこの位ひとせうとくこ流りく
 作りしふりて海島美の折りく

小雨卷附画

二三子此とく然ふ懸一ト京ある
 室所通うよめこのこく唐ううて
 そうのまらるる山つ以せて終え
 人乃歳やとせうれとんそんそ
 ちさうの地のまらとまきうしく
 かれま西せくすて伝まこりりり
 やらうれ中まらとつるのまらこ
 折もせす終うのちれれあ
 うらまら一里枝の月そ美林の皮
 柳りとの破れ雲よ吹是そまら

かろくしうて枯骨のほし荒律抄の
れちうは尾の葉よ引のうらゝゝ
みなの中へぬくのうら猫狸の思ひ
持もやうと消せぬ天井よりかき
こゝろの隅の隅の系引まゝひ冬を
かほむ坡の足ありやほしやまきあ
ていゝひん形くき四又投障子
襖はらうふとさふよあれのこけり
洒掃せりやと毎よとていし
幕とていことすねらみ月日や朽え

小雨卷附五

いさくしうてかちちたらまらくを
おれそその系中伏あまきつて
のこすまらうと院のうらのこひと
こひ舞うまひてとめと根系もや
さふゝゝゝひききのひまゝとせら
むのうとちもらひひしとさうと
のゝととてい一椀の系抄とかくす
一隅もふしは度中加頭の友城と
うまき疾笑とて風雅のまゝとて
こまやう形とてと志の形とてめ

炭の香や森さめしのすゝきり
香よまをとかゆる丁の香
連もよふりくふれ抄はして
築地のうちらの香を情うつら
松葉の煙りがすうか月よのころん
貝うら山又抄ふととり子
穂子のあよろこびもまよふ
出役又成く袴をきか
ゆらゆらあふ今のちきり
そとふ料理もさあうる恋
通園通園通園通園通園

小雨卷附六

汗入き又抄表をとりて寒まうら
か葉の是生まひくさすき
月の川いざれ山をまくれまて
旅又歌ををあらも羊の乳
招息の抱もも傳ふ梨の汁
それ人ととらゝて医者の徳を
ちの香あさう日和の涙返り
岩つら又ひそむ蟻あうまき
まよるる龍雲をわつし陰志まひ
竹籠ちちやつれさそふ児子
通園通園通園通園通園

内又幕一強てゆじき塚華痛
 招ちうらわらふ此志こくねてち
 うん仕よりうらむ中独のさし荷ひ
 ぬらみりやと夜又立海ふ
 鏡葉後すまて又江のあれまら
 糸層けしむの埋まのうく
 持ぬの灯あせむとく小海海又さる
 ちの買又さる人ちあねにち
 宿またもの春うらう向くおぬて
 そひえらる雲又あねて響うら
 園 通 園 通 園 通 園 通 園 通

小雨卷附七

作者部類

山城	艾園	芥舍	丈翠	糸魚	化蜀	碩水
文海	淡節	公成	木明	月坡	芳英	飄斎
湖風	杜蓼	外悉	枝月	春亭	桃宇	梅通
鶯語	岳鳳	黙池	好之	扇里	兆二	喜山
野有	芳水	霞洲	梅崑	秋外	野明	篤明
大和	洗我	可樵	鬘雄	帟班	素伯	月耕
和泉	此外	一審	麥雨	眉松	呂水	松五
翠山	其逸	河内	秋竹	可掬	古鏡	孤杉
攝津	蟻兄	林曹	見斎	辰斎	瓢六	鶯宿

挑兮松彥青山鶯室不角豐水石叟
 公眠可蕉松室白鷗艸齋有嚮米中
 吳雪眉山荷村梅左古人太乙曲阜據人
 古樵杉女梅陰名女米女默郎南景
 可大董秋寸松確居眷居峨月醒花
 北窠白雪佳友素龍其濤近江木公
 歸幢三教朗湖松秀夥穗一笑三香
 斗山瓜山春翠古飄廣月蒼海虛栗
 起風可竹草波嵐后蘆好好芝礪山
 鼎荷可明可山虎杖松花嵐英山朗

小雨卷作一

月舉古人松巢琴岳共心古人子湖月尼古人过女
 禾山南海杞柳米友蕙逸芊丈柯風
 不苦鬼丸柴人之五霜梅盛季文
 塵外山石美濃熊子山應護水月省
 汲古藍庭古人仁門秋守梅陵如陞石齋
 東水龜遊專雅不空聲樂飛驒元機
 猿堅赤魚信濃葛古一之可厚事松
 春季迎祥未曉嘯風圭風上野心足
 分尾一朗竹烟琴堂無名椿岱龍甫
 幻亞如僊吳羊良斗雪居逸芙可考

鷺秋遠水	訥言水竹	洗耳唼風	素山雲鮮	六槐真樹	紫山心阿	舍用禾月	其翼未足	挑朝潤屋	文河笳言
伊勢	二丘	魯長	撫泉	清氏	方村	東里	竹兩	真笑	米室
只青	敷山羽人	東泉	國彥	梅成	左文	一止	嵐齋	子客	布山
梅西	伊賀	淡遊	落城	英泉	丁酉	如雲	希得	青什	關市
坡蝶	養瓜	柳眉	枳北	出羽	夢庵	遜河	陸奧	大蟻	下野
雀雙		雪堂	雲涯	御風	南鶴	江三	多代女	貫河	挑仙

小雨卷作二

杜水	東石	波文	春湖	馬曉	一清	尾張	素西	八又	蕙雨
馮谷	一陽	完伍	思文	春松	李裳	而后	汲古	香山	都蛟
貞山	遠江	杜水	叁河	文之	貳齋	烏津	挑湖	竹鶯	五鈴
駿河	嵐牛	梅流	塞馬	栖霞	素陽	梅裡	可然	省三	梅笠
連山	晉夫	青可	蓬宇	櫓水	其節	李曠	志摩	雪當	陸水
鸞雀	澄霞	禾秀	三岳	玄堂	吾道	月底	不遷	二平	示豐
其篤	德雨	惟一	下和	應知	兩耕	蓬陽	羊立	蒼樹	六川

孚門	卓堂	鳥吟	山外	水壺	逸淵	素外	相摸	彥貫	等裁
連々	少哉	半湖	梅笠	惟草	卓郎	武藏	立宇	雲里	均外
曆外	龜得	南々	蝶翁	得蕪	溪齋	由誓	負正	可轉	左碧
曆明	吳由	竹山	魯石	祖鄉	蕙道	弄化	丹堂	雪底	山麗
草字	苴丸	奇三	普陽	萬古	抱儀	爲山	布丈	道齋	々々
古山	仙鳧	天由	荷少	未足	遲流	西馬	去由	伊豆	甲斐
巴雪	月村	晚成	丁知	等裁	松什	菊守	帆里	靜退	竹良

小雨卷作三

全那	微角	柏石	蒼布	その女	椿山	龜淵子	菊雄	四端	香以
三巴	其蓋	南陽	義香	喜年	霞雪	安房	百丈	卜草	故崖
舟曉	菘園	晴奇	李郷女	交水	下總	綾雄	太年	尋香	音好
喜命	越前	巴雄	一兆	來丘	南躰	富日	四山子	蓬交	帑中
竹雅	布珀	草臺	奇三	柳葉	士明	上總	培掌	以甫	里椿
化遊	且來	其言	溪戈	湛水	帆翠	柳塘	桂花子	北松	五雀
東林	士龍	貫昇	若狹	常陸	仁里	末成	梧青子	夷則	詠久

朱竹	涼瓦	蒼尾	三怨	梅村	蜺洲	可幸	超翠	呼亭	東樹
素明	竹塢	龍枝	翠兄	梅羽	巴水	李邑	希云	木圭	加賀
晚籟	佳曉	茶屋	水哉	坡夕	真澄	貝山	清由	北園	卓丈
梅谷	可村	半江	北鼎	車南	能登	長眉	不睡	晴江	江波
娛遊	文洞	朴崖	鶯形	擦山	鳳兮	梅谷	示雅	林波	柳壺
倚水	鳳尾	工夫	泊舟	五岳	啓司	豐收	林靜	文草	丹嶺
露蕉	怨堂	柳枝	文哉	野艾	馬耕	知省	賤可	霞朗	大夢

小雨卷作四

丹波	谷守	加青	立菴	春室	虛淵	卜少	炳文	易年	立夷
九華	照山	稻彥	雄飛	乙亥	蓼牙	都盤	如鶴	青阜	雲泰
百工	收之	巴陵	孤舟	茶山	如泉	卓里	波鄉	野乙	子謙
月樵	樹三	御風	其山	千布	有尾	澗菲	大落	秀枝	越中
鑿水	朶仙	佐渡	好靜	克明	九泉	一有	逸江	嵐布	陸平
南涯	斧刪	左山	了了	素明	喜十	可九	葺村	禾汀	恕兮
挂眉	有翠	三省	南山	鷺眠	越後	可樂	定介	依山	慶里

其栗	但馬	標梅	風乙	南強	美作	真屬
夢人	出雲	慎我	一遊	松祿	百年	舒泰
桑人	石見	一挑	古芬	吐花	鷺雪	魚躍
其山	伯耆	杜陵	蕙石	一兮	南朗	蘿城
巢明	因幡	仙林	羅文	棲鳳	盤大	寸風
南嶺	御風	一有	播磨	蒼山	深月	雲樵
鼎跡	閑雨	柿玉	竹旌	米石	吳雪	馬尹
五雲	而得	悟一	備前	半谷	布國	玉芝
石英	北年	備後	扶桑	扶洲	菊雄	露款
如水	曉村	慎奇	風外	三盃	卜隣	安藝

小雨卷作五

蘭陵	梅思	甘古	田禾	梅六	周防	風阿
長門	丈蒲	岑九	紀伊	閑那	泉蛙	為栖
梅茶	簞仙	雨猿	水齋	淡路	蔣池	半谷
希蟻	鷗池	松阜	為石	坎雨	靜眠	阿波
風棲	思風	蘿彥	木鷄	茶雷	搏風	夷岳
箏路	羽長	松丈	鯉丈	佳月	万像	素陽
露泉	推雨	頴甫	龜年	左一	芦白	釣月
素尺	石堂	羅邦	魯適	土佐	古鳳	雲外
嵐夕	ちとろ	元史	婦牛	槩石	半外	化昇
小墟	南洋	梅十	習竹	梧風	月圃	松堂

聲蛙	鶯居	玄和	讚岐	筑前	肥前	斗丈	薩摩	滄川	玄石
帶朝	菊圃	半窓	木長	宇逸	悠々	肥後	鉄冠	季風	霞岳
顥山	葵笠	郊馬	葛夫	之成	少哉	十帟	馬翁	日向	嵐夕
伊豫	陵翠	坡堂	五峯	石外	乙也	豐後	山骨	駝岳	對馬
太華	默翁	虚舟	劉州	筑後	寸長	碧水	月窓	双馬	五々
箬推	小鸞	九虹	流藻	秋外	大素	九岱	大隅	五川	壹岐
芦岬	石溪	馬槿	井水	木屑	文旨	嵐里	柳夾	速嶺	風元

小雨卷作六

遊客 桃五 女子 波洞 拾山 米海 由岐雄
 舉一 野鶴

俳諧青柳文庫 文園宗正輯 初集年々 續編 兌

此書の芭蕉翁を以て其の遺宗周于他古人の一世吟を
 採撰し當時又至と歴代乃白とら心む柳心の子に
 料、及撰入寸近世流希とる一般の扇集は口糊り
 名刺のありしとて万代の集りしは実小古古
 確とあらしむるに採撰のめりなくとん

方圓俳諧集後編

文園宗匠撰

四冊 近刻

俳 雜 俎

文園宗匠隨筆

二冊 近刻

安政二乙卯年

江戸書林

山城屋佐兵衛

同

英 屋大 助

京都書林

丸 屋善兵衛

大阪書林

河内屋藤兵衛

同

心齋橋博愛町角

河内屋茂兵衛

小雨卷作七

跋

見流々弊風百五十年一糸
おしりへこつちお米、去の白目と
のそむにむとくそとんさるハ
を、迷を八曲、行くかち也、その
迷を不、倒るも、此的の、な、化を
あ、く、そ、た、い、く、も、と、お、る、を
お、く、そ、た、い、く、も、と、お、る、を

一物なれどもうつりあはるる
の流るるもふ易のひま
をちやうとあそか
しゆ者れに給つるを
ハたさるるあの人を
あそつるものなり

梅後



小南附坂八尾

京都
書林

京都富小路三条下ル

中村浅吉



